

先生♡

仲良く
まじまじ
よ



「ハア…ハア…桃崎…」

「ふふふ…先生楽しそうですね」

「うっうわああああ!? 桃崎!? なんて…今は全校集会の時間じゃ…」

「暇なので抜け出してきちゃいました〜散歩したら先生お楽しみ中で驚きましたよ

私の靴の匂い嗅いだりおちんちんに擦り付けたり…楽しいですかそれ?」

「うう…違うんだ…これは…」

「それだけでもだいふ困った性癖ですが…裸にならないとダメなんですか」

「それは…その…」

「先生いつも厳しくて真面目なのにびっくりです。」

「す…すまなかった…頼む…許してくれ…」

「ん…なんで謝るんですか?」

「へ?それは…だって…」

「私別に怒ってませんよ〜驚いただけです〜性癖だからしょうがないと思います」

「も…桃崎…」

「まあ勝手に私の靴使うのは良くないですね、でも私も全校集会抜け出して悪い子なのでおあいどす」

「桃崎!お前はなんて優しいんだ…」

「ふふふ今度からは靴使う時はちゃんとお願いしてくださいね?ぬぎたてを貸してあげます」

「桃崎!? どうり…」

「そのかわり…続きしてください」

「え?」

「ほら早く」



「へえ〜本当にそれで気持ちいいんですね
おちんちんすごく喜んでます」

「ハア…ハア…見られてる…」

「桃崎に見られてる…」

「やっぱり見られると」

「見られてないのじゃ違いますか？」

「違う…全然違う…ううう」

「ふふふ…この変態」

「う！…も…桃崎…」

「わ〜今変態って言われて

びくっとしましたね〜」

「変態って言われて嬉しいんですか？」

「うう…」

「変態っ変態っ変態っふふ…」

「フー…フー…フー…」

「ははは先生落ち着いてくださいらよ〜」

ズボンの上からならまだしも

直接靴底に擦り付けてるんですから

そんな乱暴にしちゃダメです〜」

「で…でも…ハア…ハア…」

「ほらっ？そんなゴシゴシしないで
ゆっくり上下してっ？言っつこと聞けないならその靴没収ですよっ？」

「そっそれだけは！ハア…ハア…」

ビクッ

ハア…
ハア…

ずーはー♡
ずーはー♡

しゅっしゅっ

ゴシ、ゴシ

ゴシッ
ゴシッ

すりすり♡



「そうそう、ゆっくり上下してくださいね」

「あ……ああ……ハアハア……」

「あーただ上下するだけじゃダメです

靴底全体をおちんちんに擦り付けるようにた

円を描くように動かしてください」

「ううううふうふう……」

「そうそう！上手です」

ちゃんと言う事聞けて先生偉いですね」

「ふううう……ふううう……」

「でも……生徒の言いなりになって

今どんな気持ちですか？」

「え？……ええと……っわ……悪くない……」

「ははっやっぱ変態ですね」

「うう……あ……ありがとうございます……」

「ありがとっって！変態の返答面白いな」

ほらっもっと股開いてっ？ちゃんと嗅いでっ？」

「フーツス……ハ……ッッ」

「あははっばーかっ」

「フウウウ……」

ピクッ

あ……

んっんっ

すり……すり……

がくん……

がくん……

ぐ……ぐ……



「それにしてもなんで靴でオナニーするんですか？
どんな事想像してするのか教えてくださーい」

「そ…それは…」

「教えてくれたらご褒美あげますよ」

「ご…ご褒美!?」

「桃崎に踏まれることを想像して…」

「ん…具体的にど…ど…ですか?」

「…顔とか頭とか…」

「たまたに乳首をつま先でいじったり
それと…ち…ちんこを…」

「よく言えました〜ちなみに踏んでる
時の私はどんな顔をしていますか?」

「いや…いつもと変わらない笑顔で
楽しそうにちんこを弄っている…」

「へえ〜SMっぽく冷たくするより
そっちの方がいいんですね〜」

「てか私の足そんな目で見てたんですか?」

「ほ…本当にすまない」

「だから謝らないでくださいよー私も先生ともっと知れて嬉しいんですよ?」

「桃崎…!」

「ちよつと泣かないでください〜
私がいじめてるみたいじゃないですか?」

ガクガク

ハア
ハア
ハア
スーハー
スーハー
ハア

ゴシ
ズツ
ゴシ

シッコ



「今まで何回こういう事してたんですか？」
「わからない…もう数えきれないほどやってる…」
「私知らない間に先生のこと間接的にたくさん踏んでたんですね」
「ああ…もうこれが無いと生きて行けない…」
「相当クセになっちゃってるみたいですね」
「目頃目に入ってくる生徒の足へのムラムラはこれじゃないと発散出来ないんだ…」
「なるほど…」

ビクッ
びくん
あッ
アッ
すーはー♡
すーはー♡
すりすり…
ごしごし

「ちなみに私以外では誰の靴でしたことありますか？」

「いや…桃崎以外の靴は使ったこと無いよ…」

「へ？そんなんですか？」

「ああ…俺は確かに足フェチだが…特に桃崎は特別なんだ…」

「私が特別…どうしてですか？」

「色白で足が綺麗で可愛いくて…何より…」

「他の生徒から壁を感じる中唯一桃崎だけは優しかったから…」

「ふふ…そうだったんですねえ」

「な…なあ桃崎…」
「はい…なんででしょう？」
「その…よかつたら…踏んでくれないか…？」
「ふふ…どこをふまれますか？」
「ち…ちんこを頼む…もうイキそうなんだ…」
「え…どうしましょう…」
「た…頼む…女子高校生に
踏まれるのがずっと夢だったんだ…
なんでもするから…頼む…」

「ん…嫌です」
「なっ…」
「性癖に偏見はないですけど…
やっぱり男性の大事な所を足蹴にするなんて
失礼な事私にはできないですね」



「そ…そうだよな…す…すまなかつた
こんなこと言って」

「いえいえ…大丈夫ですよ…でも
取り返しのつかないことになる前に

「ほう…そうだな…先生という立場なのに
生徒に叱られて情けないな…」

「…まあそういう事なので靴返してもらえますか？」

「あ…ああ」

「あついや渡さなくて大丈夫ですよ手を退けるだけで」

「え…？」

「自分で履けるので、手だけ退けてください」

「桃崎…それはどういう…」



「えいつ」
「ひゃああっ!?」

ぐにっ

ど
ぐ
ッ



「もっ桃崎!? 何を…!? ああっ」
「先生はとっても真面目で素敵ですね」
だから褒美です」

「あっ足がっ桃崎の足がっ俺のを踏んでる!?!」
「まだ足置いてるだけなのにすごく感じてますね
これ動かしたら気絶するんじゃないですか?」
「や…やばい…どうにかかなりそうだ…」

「それじゃ…動かしていきまますね?」
「少しづつ激しくしていきますけど
壊れないでくださいいな? 変態さん」



「あっあっあああ〜」

「ふふふ痛くないように最初は

小刻みに振動させますね」

「あっあっあっ桃崎〜〜〜!」

「どうですか念願の女子高生の足は」

「ギモヂイイ〜〜ギモヂイイよおお〜〜〜」

「土足で踏んでるだけでこうなっちゃうんだもん

ちよるいなあ〜この変態マゾ教師」

「ハアア〜〜ハアア〜」

「先っぽからがまん汁結構出てきたので

そるそる激しくやってても大丈夫そうですね」

「いや待って桃崎これ以上は…」

「大丈夫ですよこんだけヌルヌルならどれだけ強くやっても

痛くないと思います〜」

ビクビク

ビク

ガリン

かかかかか

ずずず

ジュッ
ジュッ

ガリン

コシコシ

「待って!本当に待って!これ以上強くされたら
おかしくなっちゃう!」
「なっちやえ」

「先生…？大丈夫ですか？」

「あーあ気絶しちゃった…どうしようっかな
このまま放置しちゃったら
クビじゃすまないだろうし…」

「私一人じゃ運べないし…」

「これはもうクラスメイトを呼んで
教室まで運ぶしかないねえ」

「ふふ…大丈夫ですよ先生」

「先生は私以外の生徒と壁を感じるって言うてましたけど
本当はみんな先生と仲良くしたいんですよ？」

「真面目で厳しい雰囲気で作ってるのは
先生の方…だから」

「おらけ出しちゃいまじよ〜」

びくん

びくん

ぐいぐい

ゆさ
ゆさ



「ここは…どこだ…教室？」

「あっ先生気がつきました？」

「桃崎…ってこの状況はなんだ…!？」

「ふふふ電気あんまです…小学校の時流行りませんでした？」

「いやそうじゃなくてっああっ!」

「じゃあ皆々今から先生を足だけでイかせませーす」

「わー!」「楽しみー!」「先生頑張れー!」

（えっいつも壁を感じる皆がこの状況で笑顔…!？）

「も…桃崎これは一体…!」

「ふふふ…歓声に驚きました？」

「皆先生と仲良くしたいんですよ」

「そうなのか…!? でもこれは…!」

「まあ確かに側から見たらただのイジメですもんね」



「大丈夫ですよ〜皆先生の性癖に興味があるみたいなのでここで公開射精すれば全員と仲良しになれますよ〜」

「こ…公開射精って…」

「私がまた足でしてあげるの、先生はおちんちんの気持ちよさに集中してください」

「桃崎…ああっ」

「じゃあ少しづつ動かしてらきまーすー」

「わーわー」

「先生…今回は靴じゃなくて靴下ですよ〜」

「はっ確かに…!」

「布地の感触存分に感じてたくさん気持ち良くなってください」

「わ…分かった…あっ」



「じゃあまずはソフトタッチに静かに振動させていきます〜」

「ああああっ」

「ふふ…もう気持ちよさそうなんですわ〜」

「ピクピク震えてて可愛いです〜」

「わーっわーっわーっ」

「親指と人差し指の間に亀頭をフィットさせて

指の付け根あたりで裏筋を中心に垂直に踏みつけて

玉は踵でくりくり回してあげるようにします」

「ああっ靴下の感触がたまらない…」

「あははカウパー出てきた」

ガガガガガガッ…

あゝあゝ



「カウパーが出てきたらそれをローションがわりにするので
おちんちん全体に伸ばします〜」
「ぐっ桃崎の靴下が俺のカウパーで濡れてきている…」
「伸ばしてる間もどんどんカウパー出てきますね〜
この調子でいら子いら子してあげます」
「ひ…ヌルヌルになった靴下の感触が堪らない…」
「玉から亀頭までゆーくり足裏全体を往復していきます〜」
「摩擦がもうほとんどない…こんなの…」
「じゃあそろそろ先生も限界っぽいので〜」
「たしかに…もう2往復もすればイキそうだ…」
「ちよつと泣かせましょうか〜」
「…へっ?」



「はあ…はあ…よ…良すぎる…」

「おっ今回は気絶しませんでしたね〜したね〜えらいです〜」

「桃崎…俺は生まれて今日が一番幸せだ…」

「それは光栄です〜なんならこのままもう一回イかせてあげましょうか?」

「いや…今はもう刺激しないでくれ…」

「冗談ですよ〜それより皆の方見てくださーい」

「み…皆…」

「もう変態マゾの先生に首っ丈ですね」

「じゃあ先生…授業をお願いします」

「えっあっああそうだな…」

「クラス全員が先生を足でイカせるまで…」

「この保健体育は終わりませんからね〜ふふ」

「えっ授業ってそっち!?!」



ギョッ

ビクッ!

ドクッ

「たたくと足が痛いのよー」
「たたくと足が痛いのよー」
「たたくと足が痛いのよー」

「靴を履いて足食入ってるー」
「靴を履いて足食入ってるー」

「靴のまま先生の顔踏むなんて…」
「…目覚めそう」

「ちんちんの次に敏感なのは
多分ここだよな？
私もちんちん踏みたいから
早く代わってよ」

「裏筋あたりが一番敏感っぽいよね」
「この辺かな？」

「ぎゅー」
「ぐにぐに」
「ごごご」

「ぐりぐり」

「げし」

「もじもじ」

「靴下びちゃびちゃなんだけどもう」

「先生の顔に靴底の跡ついちゃうなあ…」

「なんかビクビクしてきた！もうすべいすべいするー！」

んんッ！
いっくッ

くっ
びゅっ

ずりッ
ビクッ

しゅっ
しゅっ

ガッガッガッガッ

「いつっちゃうの先生？
女の子にたくさん踏まれて…
こんな屈辱的な状況で
射精しちゃうの？」

「顔を足裏ですりすりして欲しい」なんて…
全問正解したからなんでもしてあげるっていうのに
こんな事でいいなんてさすが足でしか興奮できないマツ犬は違いますね〜
たくさんすりすりしてあげますね〜」

「ほらせっかくなんでも先生も受け身のままじゃなく
ペロペロしてください〜
足がふやけるまでたくさん舐めてら〜んですよ〜」

げし
げし
げし

なでなで…



「わーっでた！」

「大好きな靴下
ちゅーちゅーしながら
イけて幸せですね先生」

「足で射精してる先生の頭を
さらに靴で踏むなんて…
もうこれはハマってしまっよ…」

モゴゴ ぐんぐんー!!

ぎゅっ

ビュルルルル

「ほの全汗を吸ってるーってことあるのよ
中身全部出っつたわらっ？」

「やっぱりベストポジションで踏んでたっばい！
次はもっと早く射精させられるな」

「先生ってまだ童貞ですよね？
足で卒業させてあげますね〜」

「よかったですね先生、
手握って貰いながら
足でおまんこ作ってもらって
こうして目隠ししたら
普通に正常位で
セックスしてるように
感じるんじゃないですか〜？」

「桃崎さんダメだよ
先生はむしろ足の方が喜ぶんだから
ほら先生ちゃんと腰振って？」



「あーあイツちゃった
まだ数回しか腰振ってないのに…
先生あんまり早いと嫌われますよ？」

「靴下の香りに包まれて
靴下と靴下の間でイけて
これ以上先生にとって
気持ち良いことはないですよ？
もう普通のセックスじゃ
いけないんじゃないですか？」

「私達全く足動かしてないですよ？
勝手に一人でイって悪い子ですね、
ちゃんと慣れるためにあと
3回はイってもらわないとですね…
ほらハアハア言ってるんで
早く腰振ってください変態教師」

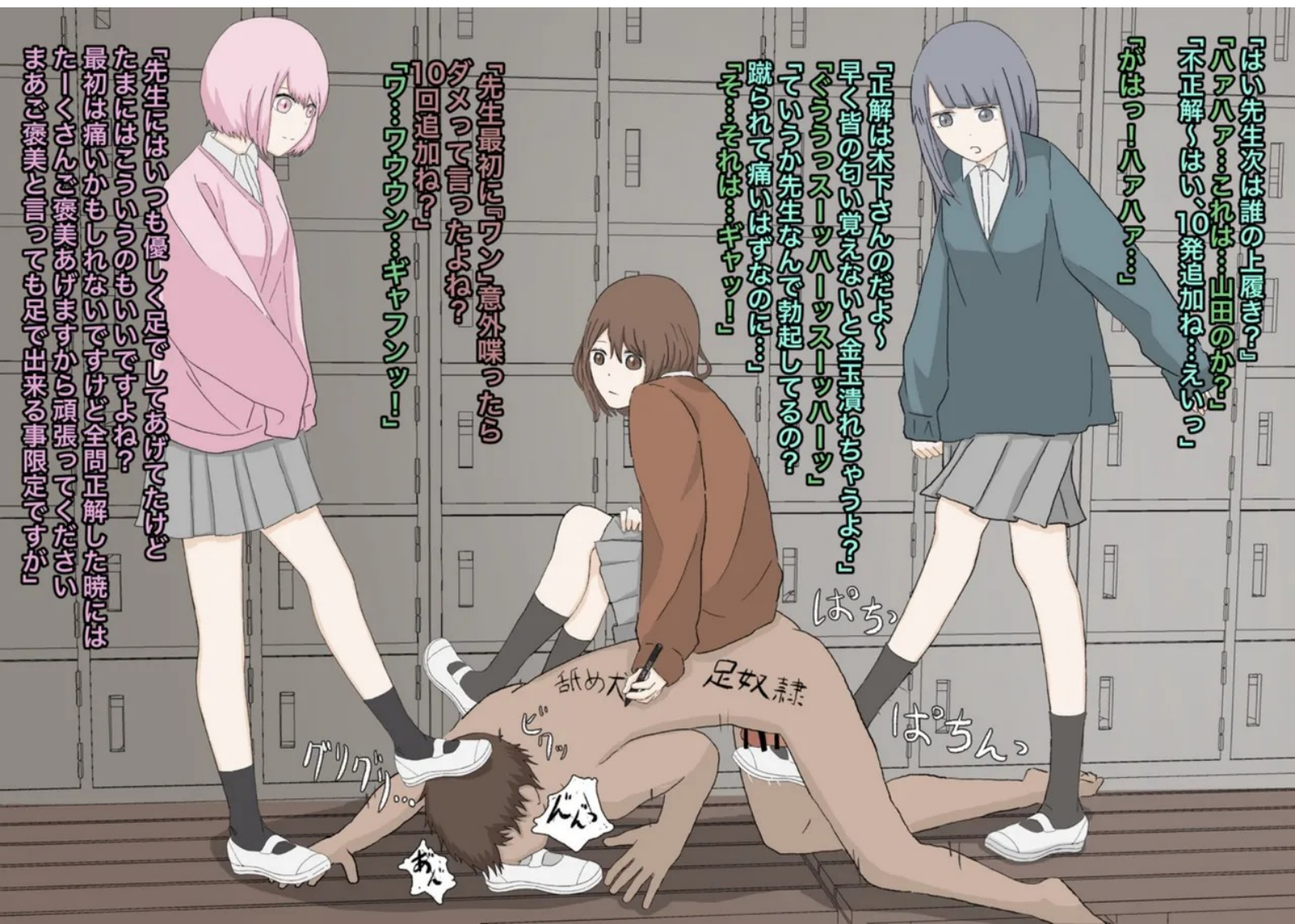


「はい先生次は誰の上履き？」
「ハアハア…これは…山田のか？」
「不正解…はい、10発追加ね…えいっ」
「がはっ！ハアハア…」

「正解は木下さんのだよ、
早く皆の匂い覚えないと金玉潰れちゃうよ？」
「ぐうぐうっスーッハーツスーッハーツ」
「ていうか先生なんで勃起してるの？」
「蹴られて痛いはずなのに…」
「そ…それは…ギャッ！」

「先生最初に『ワン』意外喋ったら
ダメって言ったよね？」
「10回追加ね？」
「ワ…ワウウン…ギャフンツ！」

「先生にはいつも優しくしてあげてたけど
たまにはこっぴどいのもいいですよね？」
「最初は痛いかもしれないですけど全問正解した暁には
たーくさん褒美あげますから頑張ってください
まあ褒美と言っても足で出来る事限定ですが」





「え？！いったいよく見えならんけど
ビクビクしてるといってらるわねこざっ
嘘でしょ先生？」

「うわあ…蹴られていくことが
本物のマンじゃなすかあ…
もう靴でも触りたくないなあ…」

「…あはは先生は何やってもいんごがでまて
偉いですねいらいら子あげますね…
ただ今回は流石に私もドン引きです
先生本気で気持ち悪いです」

舐め犬 足奴隷

なでなで…

はちんっ

ビクビク…

イッ
ウ

アッ
ン

「先生耳はどうですか？
ふふ感じてるみたいですね
でもこれって先生の耳が弱いのか
足が好きだからなのか
どっちなんでしょう？」

ひん

「ほんの耳が気持ちいいのは
わかりますが
舌がおサボりになってますよ
ちやんと舐めてください」

「ふふ改めて考えると不思議ですよね
昨日まで普通に真面目だった先生の顔が
私の足の間にあるんですから…
いい眺めです」

げしげし

ぐりぐり

ぐしぐし

がし

「あれ？先生…イっちゃったんですか？
おちんちんに一回も触れてないのに…
もう何回もこの足でイカされてますもんね、
顔に足こすりつけられて今まででされてた事
思い出しちゃいました？」

「そのうち足を見ただけで射精
できるようになるんじゃないですか？
そんなどうしようもない
ゴミマゾになっても
私は先生の味方ですよ〜ふふ」



ひゅるるるっ

すりすり..

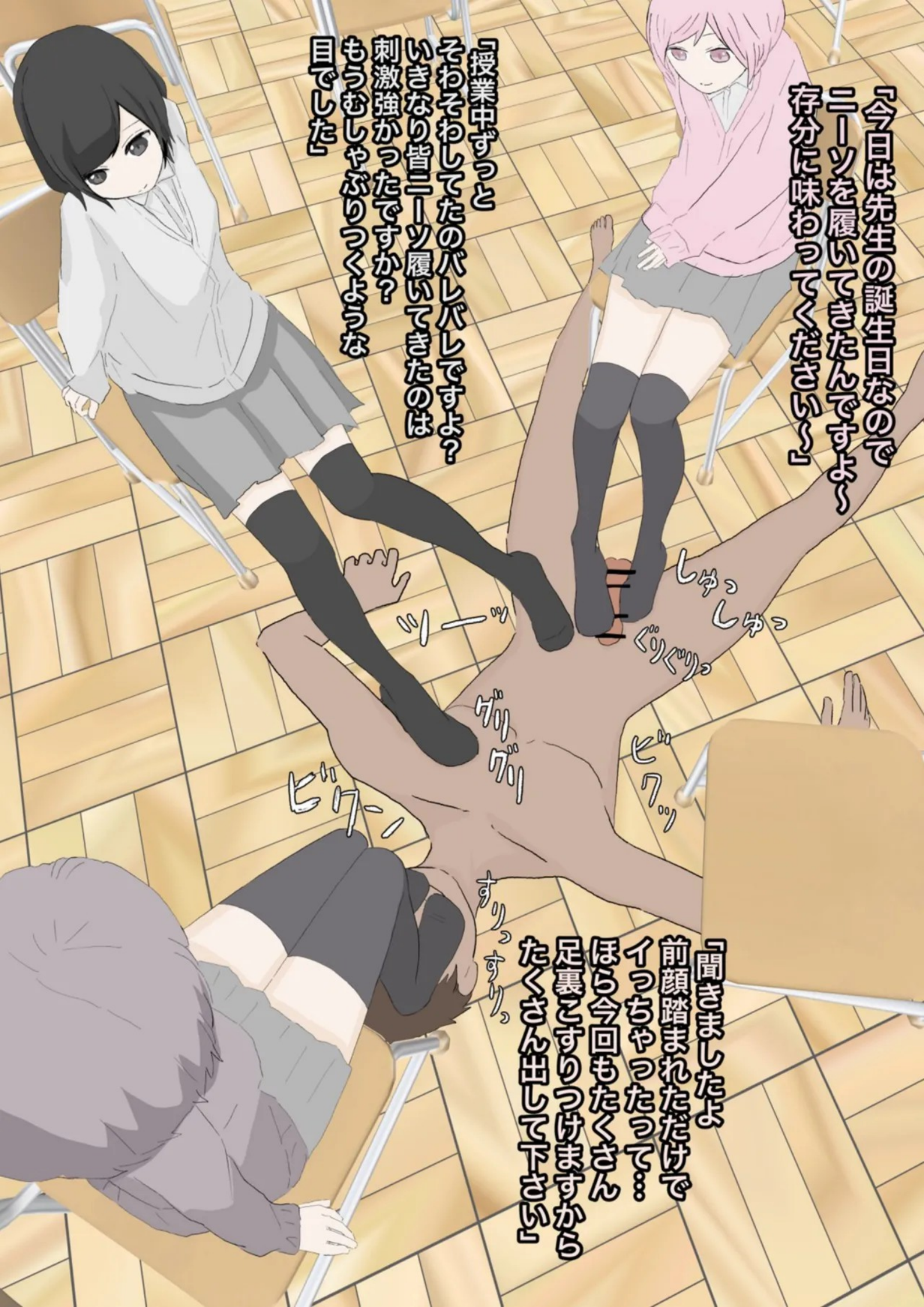
///

「今日は先生の誕生日なので
ニーソを履いてきたんですよ〜
存分に味わってくださいさい〜」

「授業中ずっと
そわそわしてたのバレバレですよ？
いきなり皆ニーソ履いてきたのは
刺激強かったですか？
もうむしゃぶりつくような
目でした」

「聞きましたよ
前顔踏まれただけで
イっちゃったって…
ほら今回もたくさん
足裏こすりつけてますから
たくさん出して下さる」

しゅっしゅっ
ぐりぐり
びくっ
ぐりぐり
すりっすりっ
びくっ
びくっ



「やっぱりしつこいより硬らな気がする
まあニーソは神ですからね〜
」ねはもうす〜いっついなやらんしすね〜」

「大丈夫ですよ先生
ニーソで早くイってしまっうのは
仕方ない事です
普段足フエテでもない私の彼氏も
ニーソ履くと足コキで
イツちやいますから
まあ靴で射精できるのは
何回考えても
理解できないですけどね」

「なんか足の裏で
モコモコ言い始めたよ？
何言ってるかわからないけど
そるそるイクっぽいね」

くちゅ、
くちゅ、

すりり...
ギョッ

ん
ん

「ふふふっもっうっちやっつた
先生のためにわざわざ
買って来たのどどんなど活して…
悪い子ですね」

「先生前に顔だけで
いったらしいですけど
乳首だけでも
絶対イキますよね？
今度試させてくださいら」

「先生情けな〜い
人として終わってるから
ののまま窒息
させてあげよっか？」



「先生すみません今は肌荒れてるので
後ろ向きで失礼します」

「先生はいつも足で攻めてる時私から目離しませんけど
たまには視界に入れずに攻められるのもいいんじゃないですか？
軽い放置プレイ的な感じで」



「ていうか正直この体制めっちゃめっちゃやりやすいです〜
普通に足コキって結構体制が辛くてすごく疲れるんですよ？
先生私たちの頑張りちゃんと分かっています？」

それら比べてこれは足を曲げ伸ばしするだけでゴシゴシ攻められますし
金玉も竿を攻めながら爪先で弄れますし足コキ向けかもしれないですね
友達とおしゃべりしながらできたりもするので重宝しようと思います。



「イっちゃいましたね
いつもは爪先の方から精子びゅーってでるから
踵側から発射するのはなんだか新鮮です」



「ん？いったのにどうして足を止めないのかって顔してますね
ふふふあんまり今回は足も疲れてないのでもう一回射精させようと思って

「やめて欲しい？だーめっ
強制射精です」

「あははは出た出た！」

あれ先生どうしました？もしかして知りませんでした？
男の人も限界まで攻められると潮吹きするんですよ



まあ足裏で潮吹きする人なんてあんまりいないと思いますけど
「どんどん出ますね、全部出し切ってください」

「おちんちんを倒さないように踏んでほしらって
先生…これかなり大変ですよ…触れるのがやっつで
カもなかなか入らないし…
このぎこちなさがいいんですか？もうっ
私片足立ちって結構苦手なんですから
バランス崩したら先生のおちんちん
大変なことになっちゃいますよ〜
ほら早くイって下さい〜」

さわさわ…
く…
く…



